

(コラム、月刊「災害補償」平成15年8月号掲載)

「讃岐うどんブームに思う」(閑談景)

地方公務員災害補償基金 訟務課長 大西 秀人

讃岐うどんがブームとなっている。味の良さと値段の安さを兼ね備えた本場の讃岐うどんの店が東京に進出し、行列ができて人気を博しているという。また、小生が4月まで住んでいた松江からも香川県に行き讃岐うどんを食べ歩くだけの日帰りツアーが企画されていた。嘘かほんとか、聞くところによると東京からわざわざ飛行機で香川県にうどんを食べに行くファンもいるという。

このブームは「恐るべき讃岐うどん」という本の出版から始まっているようである。本が当初の思惑を超えて香川県外にも広く出回り、ベストセラーとなったのは、そのネーミングによるところが大きいと思われるが、それが火付け役となり、今日のような状況を呈しているのは、讃岐うどんがそもそも計り知れない魅力を持っており、それが時代の求めているものにちょうど合致し、ブレイクしたからではないかと思っている。まさに、「恐るべき」ものであったのだ。

とにかく、讃岐の人間にとって、うどんは特別のものである。統計によると香川県人が一年間に食べるうどんの量は平均130玉であり、全国平均の4倍、もちろん断トツの日本一だという。昔から、香川県内のうどん屋は、電柱の数より多いとか、信号機の数より多いとか言われていた。もちろん、時代とともに電柱や信号機はどんどん増えているから、誰が数えたか、過去のどこかの時点での話なのであるが、うどん専門店だけで700軒強あるというからいやでも目立つわけである。また、香川県では常識であるが、ほとんどの喫茶店で「うどん」を食べさせるし、どんな格式の高いゴルフ場のレストランでも昼食は「うどん」が中心メニューである。

讃岐(香川県)出身の小生ももちろんうどん好きである。冷凍や半生の讃岐うどんは我が家の必需品であるし、帰省した際には毎日二杯から三杯はうどんを食べる。実家では、近くの製麺所兼セルフ(サービス)の店で玉買いしてきたものを家で調理し食べることが多いが、この店も食べ歩きツアーのモデルコースに入ったせいか、休日ともなると県外ナンバーの車で駐車場が一杯のようである。また、高校時代に安くてうまいからと帰りに寄り道をしていた小さな掘っ立て小屋のようなうどん屋は、村上春樹氏が雑誌に「掛け値なしのディープ中最ディープのうどん屋である」と紹介してから、行列ができる超有名店になってしまった。

ブームもここまでくるとちょっと盛り上がりすぎかなと思ひ、それが去った後が心配にもなるが、ふるさとの特産品である讃岐うどんが

もてはやされ、自らの体験を自慢げに語れると言うことは、当然悪くない気がしている。